

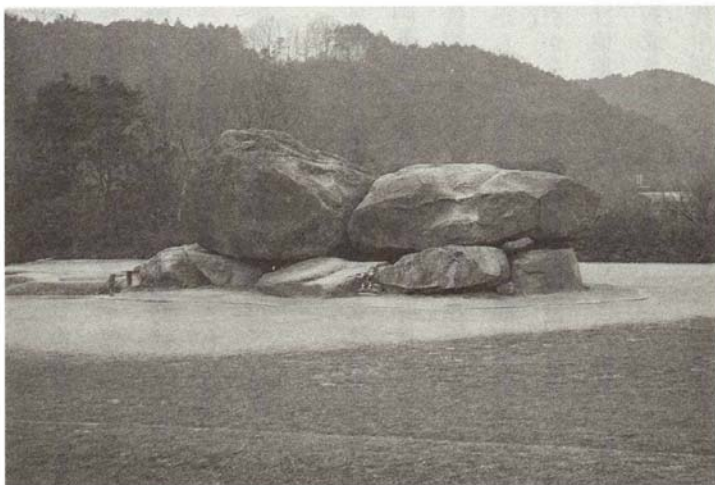
第4章 古墳時代

蘇我馬子の墓といわれる奈良県石舞台古墳（一辺五三メートル）（第6図）など、七世紀代前半の天皇や有力豪族の墓に採用されている。ただし、家父長層らによる群集墳はこの時期も継続して営まれていた。七世紀後半になると舒明天皇陵・天智天皇陵・天武天皇陵など天皇だけには八角形の墳墓を造っている。

石舞台古墳は、全長一九・〇メートルに達する巨大な横穴式石室で、玄室の天井石は長さ五・二メートル、幅四・三メートルで重量は約七七トの巨石を使用している。また、横穴式石室に代わって畿内を中心に横口式石槨が採用されるときともに、夾紵棺きょうちゆうこや漆塗木棺など持ち運びが容易な新しい棺が作られるようになる。

三 生産と流通

古墳時代の始まりと前後して、古墳を築造するために棺や外表施設の一部に新しい材料が使用され、また五世紀代には須恵器をはじめとして中国や朝鮮半島から新しい技術が導入された。更に、六世紀代にかけて鉄や塩の



第6図 奈良県石舞台古墳

生産力が向上し、装身具の玉類などで特定の産地のものが全国的に流通した。

鉄の生産

広島県東部から岡山県にかけての地方は、古代には吉備と称されていた。吉備は、弥生時代後期には首長層の墓制である墳丘墓を営み、特殊器台形土器・特殊壺形土器など共通の祭祀用具がみられ、一つの政治的まとまりを形成していたことが明らかになっている。古墳時代になると吉備の有力豪族たちは畿内勢力との連合に従うが、地方豪族としては最大の勢力を持っていたことが推測される。それは、五世紀前半に相次いで築造された造山古墳（全長三五〇メートル）・作山古墳（二八六メートル）の規模の大きさからもうかがえる。

この強大な勢力を支えていたのは、農業生産力だけではなく、鉄と塩の生産が大きな比重を占めていた（第7図参照）。鉄の生産は、一般的には五世紀後半の古墳に副葬される鉄鋌や鍛冶具の存在から、五世紀中葉には鍛冶生産が発達したものと推定されている。しかし、鉄器の原材料の多くは朝鮮半島からもたらされたものであった。国内で鉄生産が本格的になるのは六世紀後半から七世紀初めで、この時期の製鉄遺跡は岡山県津山市緑山遺跡・同県久米町大蔵池南遺跡・同県総社市千引（ササヒ）谷遺跡・広島県世羅町カナク口谷遺跡など、吉備の山間部や平野部で広く確認されている。これは他地域に比べ鉄の原材料がこの地域に豊富だったからにはかならず、結果的に全国で最大規模の鉄生産地が形成されたのである。

塩の生産

吉備のもう一つの特産品である塩は、弥生時代中期に生産が開始され、製塩遺跡は尾島半島周辺の海浜部に立地していた。古墳時代に入ると遺跡の数は増加するが、小規模なものが多く、まだ專業化していなかったと考えられている。しかし、六世紀後半になると香川県直島町喜兵衛島や岡

第4章 古墳時代

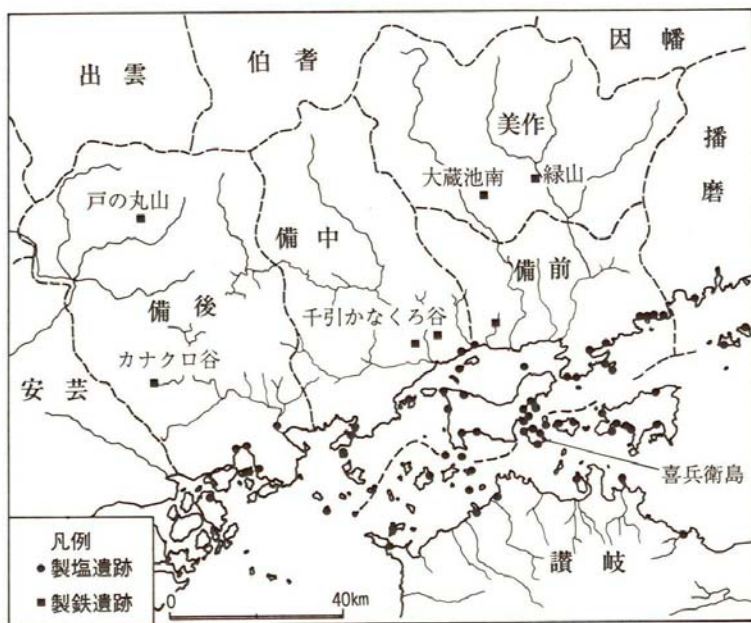
山県倉敷市阿津走出遺跡のように、使用済みの製塩土器が厚さ1メートル以上に堆積し、「土器層」を形成するまでに至った。これは製鉄と同様に、專業集団が成立したことを示すとされている(第7図)。

製鉄・製塩ともに專業化された当初は吉備勢力がその実権を握っていたものと考えられる。しかし、その後七世紀にかけて中央集権化が進み、屯倉みやげの設置による大和政権の直接支配が浸透するにつれて、その生産と流通は吉備の豪族の手から離れていった。

玉の生産と流通

古墳時代の玉類には勾玉・管玉・なつめ・きりこ・切子

玉・丸玉などがあり、その材質もヒスイや碧玉・緑色凝灰岩・水晶・滑石・メノウ・琥珀・ガラスなど多種にのぼる。これらの玉類の生産地は時期の変化とともに移動がみられ



第7図 古墳時代における中国地方の鉄・塩生産遺跡分布図

る。

四世紀代は、勾玉はヒスイ製が多く、その産地は新潟県の糸魚川流域である。管玉は緑色凝灰岩製がほとんどであるが、産地は石川県にある。このようにこの時期の玉生産は北陸地方の日本海側に集中している。

五世紀代になると、加工が容易な滑石が新しく玉の素材として使用され、装身具や祭祀具として多く用いられた。また、玉の生産地は出雲と畿内に移動し、出雲では碧玉やメノウから管玉や勾玉を生産した。畿内での玉生産の原材料は、和歌山県の滑石、鳥根県の碧玉、石川県の緑色凝灰岩、新潟県のヒスイで、琥珀は岩手県または千葉県から持ち込まれている。奈良県曾我町曾我遺跡では五世紀中ごろから六世紀初めにかけて生産され、完成品や未成品が約八五万点も出土している。

六世紀代では、ヒスイや滑石の玉類は作られなくなり、出雲で碧玉やメノウ・水晶を使用した管玉・勾玉・切子玉が生産される。一方、畿内での玉作りは途絶える。

各地で生産された玉類は、全国で装身具として使用されるほか、祭祀の必需品でもあったため、曾我遺跡のように、大和政権は五世紀代には畿内に原材料や工人を集めて、直接生産したものと考えられる。

須恵器の生産

朝鮮半島の三国時代に生産された灰褐色で硬質の陶質土器は、四世紀から五世紀にかけて北部九州や畿内の遺跡を中心に多数確認されている。須恵器はこの陶質土器の製作技術をもとに国内で作られた土器である。須恵器の集中的な生産は、五世紀前半に大阪府南部の堺市・和泉市・岸和田市・南河内郡狭山町にまたがる陶邑すえど古窯跡群で始まる。陶邑では大和政権の管理下、古墳時代から平安時代までの須恵器窯が一〇〇〇基以上営まれた。一方、地方では西日本の一部の地域を除き、五世紀後半か

ら開始され、初期の段階では陶器に追従するような器種や器形を作るものも多い。

須恵器生産の最大の特徴は、ロクロの使用と窯の採用である。須恵器窯は床面が傾斜面をなすトンネル状の単室窯で、一〇〇〇℃以上の還元焰で焼成し、最終段階で燻焼するため、須恵器の表面は青灰色になる。

初期須恵器には甕・壺・器台・高坏・蓋坏・甗はちなどの古墳時代を通じて一般的な器形と、注口樽形土器・耳付き四足盤・樽形甗こし・甗こしなどの特殊な器形のものがあるが、後者は須恵器生産が全国的に広まるとともに消滅する。須恵器生産は五世紀末以降急速に拡大し、六世紀中ごろには九州から東北地方南部にかけて各地で盛んになる。

当初、須恵器は貴重品で古墳への副葬も少量であったが、五世紀後半以降には生産量の増加に伴い大量に供献されるようになる。六世紀には日常雑器としての使用がしだいに定着していった。

埴輪の生産

埴輪はじわの祖形となる土器は、弥生時代後期に吉備で作られた特殊器台形土器と特殊壺形土器である（第8図参照）。吉備では弥生時代中期後葉以来集落で普通の器台が使用されていた。こ

れが後期中葉になると口縁部や脚部に文様が施され、壺も長頸化が目立つようになる。しかし、後葉になつて間もなくこれらの土器は集落から姿を消す。これに対応するかのようになり、後葉に円筒形で高さ一メートル前後の特殊器台形土器と、高さ四〇～五〇センチメートル前後で胴部が直径四〇センチメートル前後の玉葱形をなす特殊壺形土器がセットで首長層の墳丘墓に使用されるようになる。古墳時代になるとこれに酷似した円筒埴輪が、箸墓古墳や奈良県天理市西殿塚古墳・岡山市都月坂1号墳などで発見されている。

古墳時代の埴輪生産は四世紀後半に集中的な操業体制が整うと考えられ、特に大王の古墳が集中する地域

には、恒常的な生産工房が存在する。五世紀前半の誉田御廟山古墳（応神陵）を擁する河内古市古墳群では、藤井寺市土師の里遺跡と羽曳野市誉田白鳥遺跡が知られ、誉田白鳥遺跡では九基の窯跡が発見されている。また、大阪府北部の三島野古墳群でも、五世紀中ごろから六世紀中ごろの埴輪窯一八基・埴輪工房三棟と工人の集落からなる高槻市新池遺跡が発見されている。

各種の埴輪のうち、円筒埴輪は当初から製作されているが、家形埴輪や楯・靱・短甲・大刀などの武具形埴輪、蓋・翳などの首長の權威を示す埴輪などは五世紀前半に盛んに作られる。その後五世紀後半に



第8図 特殊器台形土器から円筒埴輪へ

- 1 立坂型（山磨康平ほか『中山遺跡』より）
- 2 向木見型（金井・小都編『松ヶ迫遺跡群発掘報告』より）
- 3 宮山型（『総社市史』より）
- 4 都月坂1号墳出土（『吉備の考古学』より）

なると人物埴輪の製作が始まる。なお、これら各種の埴輪は六世紀末の前方後円墳の衰退とともに消滅する。

古墳の石材と産地

古墳を築造する場合、埴輪以外にも石室の構築や墳丘外表面の保護・装飾のために多量の石材が必要となる。一般的にこれらの石材は付近の丘陵や河川から調達すること

が多いが、古墳によつては、特定の産地の石材を使用することがある。

葺石かきいしでは、神戸市五色塚古墳ゴシキづかの場合黒色の礫が使用されているが、これは英雲閃緑岩で淡路島の東海岸で産するものである。また、奈良県天理市櫛山古墳の白色の小円礫も、淡路島南東部の吹上浜で産する。

竪穴式石室の側壁には扁平へんぺいな割石が使われるが、摂津では石英粗面岩、河内・大和では安山岩、山城では粘板岩と、それぞれ地元の石材が使われる。しかし、紀伊や阿波産の緑色片岩や紅簾片岩こうれんなどの美しい結晶片岩は、広く畿内全域で使用されている。

石棺はしばしば軟らかい凝灰岩で製作される。播磨の竜山石は長持形石棺・剣抜きくわぬき式石棺などに加工され、約一〇〇メートル離れた京都府城陽市久津川車塚古墳などでも使用されている。また、北部九州の古墳からは石人・石馬と呼ばれる石製品が発見されるが、これらは阿蘇溶結凝灰岩を素材としている。

四 生活

庶民の暮らし

近年、日本の「ポンペイ」ともいうべき集落が、群馬県子持村黒井峰遺跡くろいのみねで発見された。この遺跡は、六世紀中ごろに噴火した榛名山はるなの軽石によつて厚さ二メートルにわたって覆い尽